

## 第1章 私の「生まれ」と「育ち」

### 第二の故郷・台湾での原体験

人には、それぞれの「生まれ」と「育ち」と「出会い」がある。その織りなす綾を背負って生きているのが、現在の自分の姿である。

「十人十色」というが、それは、どんなにささやかなものであっても、かけがえのない独自のものだ、と私は思う。

中でも、物心のつき始めた少年・少女時代に、どんな教育を受け、どんな環境の中で生きたか。また、感受性の強い二十歳前後に、どのような体験をし、これらをどういう形で主体的に受容したか。これらは、おおげさに言えば、その人の人生を左右するような根幹のファクターになる、とは言えないだろうか。

貧弱ではあるが、私にも私なりの、心の「オリエンテーション」(定位)がある。そして、それが青少年時代の「原体験」に基づくものだけということ、いまも強く感じている。私自身の、中国を始めとする広範なアジア地域の人々との関わり合いも、この“母斑”を抜きにして語ることはできない。

一九三一年(昭和六年)七月十一日、私は東京で生まれた。日本の中国侵略史の大きな節目となった「満州事変」(柳条湖事件)が発生した年である。

そして、私自身が中国人社会との関係を持つようになったのは、三歳のときからだ。いまは亡き父親が当時、日本の占領下にあった台湾に、「総督府」の小役人として赴任したのが、そもそもの因縁の始まりだった。

最初、この島の都、台北にいたわれわれ一家は、その後、板橋、基隆、淡水など、台湾北部の地方都市を転々と移り歩いた。ずっと後になって、母親に聞いた話では、父親は“土佐のいごっそう”というか、かなり頑固な偏屈者で、よく上役に植民地政策改善の意見を具申しては、それが入れられずに、折り合いが悪かったということだ。

#### ハダシとビーフン

しかし、そんなことは、幼い私にとって、何の関係もないことだった。あちこちを渡り歩きながら、その土地、土地の環境に溶け込み、自由に羽を伸ばしていった。

いまでも思い出すのは、炎天下の砂利道を、毎日のようにハダシで飛び回ったことだ。「本島人」(当時、台湾にいる中国の人たちを、日本人はこう呼んでいた)の子供たちがそうしていたように、私もまたハダシで遊び回り、足の裏は皮革のように固くなっていた。

母親から「一銭玉」をもらうと、よくハダシで家を飛び出し、一目散に本島人の営む露店街へ走った。そこで、「リーキャンム」(甘酸っぱい干し梅の菓子)、「オアピン」(サトイモを原料にしたアイスクリーム)、「ユーチャーコエ」(細長く棒状に練った小麦粉を油で揚げたもの)、「カムチャ」(サトウキ)などを買って食べた。いずれも、現地の子供たちが好んで口にするおやつだった。

家でも、よく本島人が常食とする「ビーフン」(米粉)を食べた。母親のつくる「ビーフン」の味は、天下一品だった。初めて出会う中国人や華僑、華人たちには、自己紹介の際、「我在台湾吃米粉長大的日本人」(私は台湾でビーフンを食べて育った日本人です)と言うのが口癖になった。その意味で、台湾は私の「第二の故郷」である。

だが、当時の台湾は、やはり日本の植民地であった。物心がつくようになるにしたがい、少数の日本人と、大多数の現地の人たちの間に、はっきりとした区別があり、差別があることが分かるようになった。

子供の世界でも、いさかいが始まると、日本人は汚い言葉で現地の子供たちを侮辱した。殴る、蹴るは日本人の“一方通行”で、本島人、つまり中国の人たちは、いつも泣き寝入りの状態だった。こんなとき、幼い私も、決して例外ではなかった。五つも六つも年上の

ガキ大将の指図に従って、わけも分からずに、集団でいたずらを働いていた。

## リンカーンの絵本

しかし、こんな子供心にも、一つの転機が訪れた。それは台北から近郊の田舎町、板橋に移り、小学校に上がって間もないころだった。父親から与えられた一冊の本が、私の心を揺さぶった。それは、講談社の絵本『リンカーン』だった。

野ネズミを痛めつける悪童たちを、かき分け、ぶん殴って、その小さな命を救った話。一日中、魚釣りをしてやっと釣り上げた一匹の魚を、母親から「国を守る立派な人たちですよ」と教えられていた、通りがかりの兵隊さんにあげた話。どしゃぶりの日、急用で大事な用をたしに行く途中・道端の溝に落ちて苦しんでいる子ブタを見つけ、それを拾い上げて家のストーブで暖めてあげた話。長じて奴隷解放のため、南北戦争までやって、人間の平等と差別解消のために生涯を捧げ、ついに凶弾に倒れたリンカーン。

やっと字を覚え始めていた私は、無我夢中でこの物語を読み、すっかり、リンカーン党になってしまった。それからは、本島人の子供たちをいじめることをやめた。そして、そんなことをする同胞を見ると、子供心にも不条理だと思うようになっていった。

ある晴れた夕暮れ、日本人のいたずら小僧たち四、五人が、低い塀の上に本島人たちが干している残飯の入ったザルを、次々に引っくり返した。やっときれいに仕上がった乾飯が、下の砂利道に散らばってしまった。現地の人たちにとっては、かけがえのない食料品である。

本島人の子供が抗議すると、日本の子供たちは、寄ってたかって、その子供を殴り出した。少し離れたところで、この一部始終を見ていた私は、もう胸の高鳴りをどうすることもできなかった。思わず、「やめろ！」と叫んで走り出し、本島人の子供の胸ぐらをつかんでいた、自分と同じ日本人の子供を突き飛ばしていた。あまりの勢いに気をのまれたのか、彼らは何の抵抗もせずに逃げていった。

生まれて初めての体験だった。その夜は、自分でも興奮して、なかなか寝つかれなかった。この日の出来事を、私はとうとう両親にも話さずじまいだった。いつもの遊び仲間でなかったせいか、この「小さな事件」は、特に問題にならなかった。

ただ一つ、はっきり言えることは、私の心の中で、リンカーンに対する憧憬の念が、確実に募っていったことだ。小学校の高学年、そして中学に進むようになってからも、この気持ちは変わらなかった。そして、本屋でリンカーンの伝記などを見つけると、わずかな小遣いをはたいて購入した。

「君は一部の人を永遠にだますことができるかもしれない。あるいは、全部の人を一時的にだますことはできるかもしれない。しかし、すべての人を永遠にだますことはできない」  
「人民のための、人民による、人民の政府は、決して地球上から消滅してはならない」

少年時代に覚えた、リンカーンのこんな言葉が、いまでも脳裏に生きている。父親が与えてくれた一冊の絵本、第十六代の米国大統領リンカーンとの出会いが、私をつき動かした最初の原体験だった。

## 戦死した父のこと

一家が淡水にいたころ、父親は兵隊にとられた。私の小学三年が終わりに近づいた一九四一年（昭和十六年）の二月中旬だった。そして、わずか三ヵ月後の五月二十五日、福建省福州の太古鎮付近で戦死した。

その年の夏、台湾南部の高雄にあった所属の台湾第六部隊で、同じ戦闘で死んだ十人の将兵の合同葬儀が行われた。式の後、部隊の一室で、当時の戦況報告を聞かされた。何でも、本隊が出撃していった後、わずか十人で留守番を勤めた父親たちが、千人を超える「敵」の包囲攻撃に対し、どんなに勇敢に戦い、散っていったか。その顛末が縷々述べられた。

それは暑い日だった。私は長い報告を、ボロボロ涙を流しながら聞く一方で、差し出されたアイスキャンデーを、何本もほおぼっていた。母親に再三たしなめられたが、どうすることもできなかった。部隊葬を思い起こして、いまでも一番頭に残っているのは、父親に関する“武勲伝”よりも、あのときのアイスキャンデーのうまかったことである。

父親を失った悲しみは深かった。後に残された一家六人（母親と私を筆頭に子供五人）にとっては、かけがえのない大黒柱だった。しかも、小学四年になったばかりの時点で死んだせいか、父親に対しては一種の美しい、純粋なイメージが残っている。

だが、父親を直接的な死に至らしめた中国人に対する憎しみは、不思議なほど湧いてこなかった。当時の私たちは、この戦争が、「大東亜共栄圏」を築くための「聖戦」だと教え込まれていた。それにもかかわらず、中国人に対する憎しみの感情が湧いてこなかった原因は、どこにあったのだろうか。その“責任”は、ほかならぬ父親自身にあった、と私は思う。

### 「本島人」とのきずな

先にも述べたが、父親の役人生活は、決して恵まれたものではなかった。初めは台北にいたが、それ以後はずっと、地方勤務が続いた。そして、政策改善の意見具申が思うように通らず、上役との関係はよくなかったようだ。実際、わが家には本島人の訪問客が多かった。不合理な植民地政策に陳情、抗議する人たちだった。父親は、どんな人でも座敷に上げ、夜遅くまで彼らの話に耳を傾けている様子だった。夜中に便所に起きたときなど、ふすまのすき間から明かりが漏れ、現地の人たちの声がよく聞こえた。

父親は、彼らの苦衷を聞いて黙っておれなかった。しかも、それがなかなか政策に反映できぬことに、腹立たしさを感じていたに相違ない。そんな境遇の中で『リンカーン』の絵本を与えることで、自分が日ごろ思っていた気持ちを、息子に伝えたかったのかもしれない。

敗戦後、押し入れの奥にしまっていた父親の書籍の整理を手伝わされたことがあった。英語やドイツ語の洋書が多かったが、日本語の書物もあった。新聞紙で包まれた本のカバーをめくっていくうちに、『ある青年の手記』という題名が目にとまった。そこには、外国の貧しい青年があちこちで迫害にあい、職を転々としながら、世の不条理に挑戦していく姿が描かれていた。当時、中学の二年生（往時の台北一中）になっていた私には、おぼろげながら、それが父親の姿と重なって見えた。

台湾で育った少年時代を回顧するとき、私は、『リンカーン』の絵本の中に、また死んだ父親の現地の人たちとの接し方の中に、自分自身の生き方についての、大切な原点を持ったと言える。口はばった言い方かもしれぬが、そこには異なった民族や人種に対する差別に疑念を抱き、同じ人間として、真に平等な関係を希求する心情が芽生えていた。

### 人の下に人をつくった日本

私の歩みの中で出会った忘れ難い「第二の体験」は、台湾から日本の内地に引き揚げたからのものだった。敗戦後の貧苦の生活と同時に、ここでも「差別の世界」に遭遇したのは、大きな衝撃だった。

死んだ父親は高知県の人間、卒寿（九十歳）を迎えてまだ健在な母親は宮城県の出身だった。そして、私は五人兄弟（三男二女）の長男として東京で生まれ、三歳から十四歳までの幼少期を台湾で過ごした。

ところが、敗戦翌年の一九四六年（昭和二十一年）二月、われわれ一家が引き揚げた先は、縁もゆかりもない奈良県だった。台湾で知り合った親切な復員の兵隊さんとのご縁がもとだった。

わが家は、祖父と父親だけでなく、父親の男兄弟も戦争で失っていた。しかも、祖父の

時代から台湾に移住していたため、高知に帰るすべがなかった。母方の祖父母もすでに亡く、宮城にも頼れる身内はいなかった。

## 奈良に引き揚げて

途方に暮れた母親は、父親と結ばれた東京に引き揚げよう、と決意していた。父親は早稲田大学の出身で、次男だったこともあり、母方の姓を継いだ。その上、母の父も死去していたので、二人が人生の新しいスタートをきった早稲田の杜に近い住居、「東京都淀橋区戸塚町」（現在の新宿区西早稲田）を、本籍地としていたのだった。

ところが、敗戦後、わが家で食事のお世話をしていた五人の兵隊さんの責任者だった木谷さんという方が、この事情を知って強く反対した。

そして「東京は大変ですよ。奈良の田舎に行けば、私の叔母がいます。そこならば、何とか食べていける」と言った。

このありがたい申し出を、母親は深く感謝しつつも、丁寧にお断りしていた。そして、一つ一つの行李の木札に、東京の本籍地を表記した。一家六人は基隆港に向かい、引き揚げ船の到着を待った。

いよいよ三日後に乗船と決まったとき、私たちの所在を突き止めた五人の兵隊さんたちが、台北から駆けつけてきた。木谷さんが、「東京の様子を聞きました。一面が廃墟と化しているようです。女手一つで、五人の子供を育てるのはとても無理です。これが奈良の叔母への手紙です」と言った。そして、有無を言わず、木札の表記をカンナで削り、「奈良県南葛城郡葛城村僧堂」（現在は奈良県御所市に所属）と書き換えてしまった。母親は目頭を押さえつつ、このご好意を受けた。

二月二十三日の早朝、引き揚げ船は厳寒の和歌山県田辺港に着いた。南国育ちのわれわれにとって、内地の冬は身を切るように痛く、冷たかった。見ず知らずの土地に引き揚げて、これからどうなるのか。五人の子を抱えた母親の気持ちは、いかばかりだったか。思い起こせば、いまでも胸が痛む。

しかし、わが家族は幸運だった。私たちを迎えてくださった木村家は村の地主だったが、すでにお父さんを亡くされ、わが家と同じように、かつ同じ年ごろの子だくさんの家庭であった。長男の宗雄さんは明るくて賢い少年で、私と同級生と分かり、すぐ大の仲よしになった。

木村さん一家は、われわれのために、六畳と四畳半の「離れ」を提供し、心から励ましてくださった。

教員の免許状を持っていた母親は、村人のお世話で、近くの小学校の先生となった。われわれ兄弟も、それぞれ学校に通い始め、内地での生活は何とかスタートを切った。

## 厳しい食糧難時代

葛城村は、かつて楠木正成が立てこもった千早城跡のある金剛山の麓にあった。私自身はまず県立の畝傍中学に通い、学区制の改革で、間もなく新制の御所高校に転校した。貧しくて自転車が買えなかったため、往復十五キロ前後の道程を毎日、高げたを履いて通った。いまは立派に舗装されているが、当時はまだ砂利道だった。

高げたは、一ヵ月余り履くと、歯が擦り減って、台を傷めるようになった。そこで、堅い木の板を削って、新しい歯に入れ替えて履き続けた。それが擦り減ると、もう一度、歯を入れ直した。三度目の歯が擦り減るころには、高げたの台も、指先の部分が擦り減って使えなくなった。そこでやっと、新しい高げたを買ってもらった。

敗戦後の日本は、厳しい食糧難の時代だった。農村は都会に比べると恵まれていたが、わが家は「非農家」だったので、やはり大変だった。

一日に二合余りの配給米だけでは、育ち盛りの食欲は、とても満たせなかった。しかし、

当時の母親の月給は三百円だ。これに対し、ヤミ米は一升（十合）が百円もし、とても手の届く状態にはなかった。しかも、満足に副食のない時代で、一升と言え、六人家族が腹一杯食べようとすると、一食分にも満たぬ量だったのである。

「すいとん」（うどん粉を水でこね、団子にして汁で煮た食品）もよく食べたが、団子の中身には「米ぬか」や「ふすま」（小麦をひいて粉にしたときにできる皮の屑）が、たくさん混ざっていた。学校へ持っていく弁当は、底に分厚く「おから」を詰め、その上に麦の入ったご飯をのせたものだった。

よく弟妹たちと、土手や山中に生える野草を摘んだ。「ヨメナ」「タンポポ」「ツクシ」「ノビル」「ゼンマイ」「ワラビ」「イッタンコ」食べられる野草は何でも食べた。しかし、ひもじい思いは続き、“栄養失調”の状態に陥っていた。

やがて、一家六人の中に、遅れて台湾から引き揚げてきた叔母と従姉妹の二人が加わった。いまは亡き叔母は、熱心なクリスチャンで、私やすぐ下の妹を、幼いころから、わが子のようにかわいがってくれた人だった。その叔母は、村役場で仕事をするようになった。食べ盛りの六人を、母と叔母の二人が必死の思いで育ててくれた。そして、生活は少しずつ好転していった。往時を思い出すとき、皆が寄り添って懸命に生きた、ぬくもりと、懐かしさが込み上げてくる。

#### 内地にもあった差別

さて、御所高校に通うようになって、私はどうしても避けて通れぬ問題があることに気づいた。そこには、台湾で体験したと同じようなことがあった。それは、日本の歴史が自己の内部に引きずってきた「部落問題」（＜注＞参照）だった。

一般の家庭、つまり「非部落」の出身者たちは、話題が部落のことに及ぶと敏感に反応し、別人のように変わった。成績がよく、良識があるはずの生徒も例外ではなかった。一方、部落の人たちの間にも、積年の心理の屈折がはっきりと読み取れた。

敗戦後の荒廃した時期と重なっていたせいもあろう。休み時間中に、教室内でヒロポンの注射を打つ者がいた。校庭の裏側では、ドスを持って渡り合う生徒もいた。すれ違いに、ちょっとそでが触れただけで、「オイ、兄ちゃん、十円出しな」とすごむ者もいた。こんなことが学園の内部で起こり、補導教官も、うっかり手をつけられぬ、一種の“無政府状態”が続いていた。

トラブルには少なからず部落出身の生徒たちが関わっていた。それは、敗戦後の台湾で、戦時中に日本人に痛めつけられた「本島人」の生徒たちが、その意趣返しをする光景に似ていた。とは言え、台湾での経験は、異民族との間の矛盾であり、差別が生んだものだった。だが、引き揚げた内地で見たものは、同じ日本人同士の間、全く同じような性質を持つ問題であった。

実際、私自身にとって、それは幼いころの台湾での体験と、完全に二重写しになって見えた。それだけに、引き揚げて、来た「よそ者」の私の心を捕らえて離さなかった。そして、理由はどうであれ、この「歪んだ人間関係」を人為的に作り出してきた側にこそ、より大きな問題がある、と思い続けた。

#### 「共生への模索」

私は生徒会に首を突っ込み、この問題の解決に取り組んだ。

部落の有能な生徒たちと進んで話し合い、生徒会やクラブ活動で、責任ある地位についてもらった。クラス間の野球、バレーボールなど交歓試合も積極的にやり、白日の下で、別け隔てのない心の交流の場をつくることに努めた。

部落の仲間長期欠席者が出ると、放課後を利用して先生と家庭を訪問、ご両親とも懇談した。ひどいケンカで入院患者が出たときなど、関係者と共に病院へ行き、その原因と

事後の防止策を皆で話し合った。

互いに、心の扉が開き始めたころ、各部落の代表たちに集ってもらい、こんな提案をした。「明朝から、始業の一時間前、午前七時まで、雑巾を一枚ずつ持って登校してほしい。これから一ヵ月間、われわれで廊下の拭き掃除をしよう」

当時、「非部落」の子女の間には、なお部落の生徒に対する、一種の蔑視と恐怖感が残っていた。そんな暗さを吹き飛ばしたい、という気持ちからだった。

翌朝、約束の十分前には、十二人の仲間が全員、顔を揃えた。手分けして、一斉に雑巾がけを開始した。四十分後には、木造二階建ての全校舎の廊下が、きれいさっぱりとなった。これを知って、一般の生徒の間からも続々と参加者が現れた。協力の輪は広がり、「雑巾がけ」は思いがけぬ成果を収めた。

校長先生や補導教官、そして父兄たちも、われわれの行動には目を見張り、励ましてくださった。こうして、お互いの信頼関係ができ始めると、不祥事は際立って少なくなり、学園は明るく、生き生きとしていった。

## 日本近代化の陰で

後日談だが、若い記者時代に、ある台湾出身の中国人の先輩と話し合う機会があった。この人は、「われわれは、かつて『第四種日本人』だったのです」と言った。不明にして、初めて聞く言葉だった。彼によると、第一種が大和人、第二種が帰化人と部落民、第三種はアイヌ人と琉球人。そして最も身分の低い第四種が朝鮮人と台湾人だった。その言に従えば、私の少年時代のかけがえのない原体験は、「第四種」と「第二種」の人たちとの交錯の場で生じた不条理に対する、私なりの反応であり、挑戦だった。

明治以降、日本は西欧諸国に学んで、近代化を進めてきた。その中で、「天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず」という名言を残した先覚者もいた。確かに、封建時代の身分制度改革など、一定の成果はあった。しかし、それは主として「大和人」の中での出来事だった。

実際には、近代化の過程で、「大和人」はその周囲の「日本人」に、差別しつつ同化する政策を強いていった。それはやがて、「八紘一宇」「大東亜共栄圏」という名の下に、中国大陸から近隣のアジア諸国に至る、侵略へと波及していったのである。

### <注>部落問題

ここで言う「部落」とは、「被差別部落」のこと。徳川幕藩時代に政治的につくられた士・農・工・商・穢多・非人の身分制度の中で、「四民」（士・農・工・商）とは別に、「穢多・非人」として差別された人たちが住まわされた地区を言う。

『広辞苑』や『朝日現代用語・知恵蔵』（一九九三年版）などによれば、「穢多・非人」とは江戸時代の賤民とされた人たちで、生産的な労働ではなく、社会の底辺で遊芸、罪人の送致、刑屍の埋葬などに従事した人たち、とある。一八七一年（明治四年）の解放令で穢多・非人の呼称は廃止されたが、「特殊部落」の蔑称を用いた。

また、「未解放部落」とも言われ、一九六九年から始まった被差別部落改善のための行政では、法的に改善された部落について、「同和地区」という言い方がなされた。一九八六年の政府調査では、「同和地区」は、全国千二百二十七市町村に四千六百三地区、約百十六万人。地区別では、関西地方を含む西日本が七八・八パーセント、関東に一三・七パーセント、中部が七・五パーセントとなっている。

一方、この問題に深く立ち入って研究している解放出版社の『部落問題事典』によると、部落問題の現況を次のように述べている。

「現在、法律や制度あるいは社会的身分の上で、部落あるいは部落民というものは存在しない。また日本国憲法第14条には『すべて国民は法の下に平等であって、人種・信条・性別・社会的身分または門地により、政治的・経済的・社会的関係において差別されない』と規定し、基本的人権尊重の理念を明らかにしている。したがって、部落差別のような非

民主的な人間差別はあり得ないことになっている。しかし、そのあり得ないものが、客観的に厳然として存在していることは、またまぎれもない事実である。『六〇〇〇部落、三〇〇万人』といわれる部落が全国に散在しているのである」。その上で、

「法的・制度的には部落に対する身分上の差別扱いは表面的・形式的には消滅した。したがって、部落および部落の人々を計数化することは、本質的に疑点がある。また法的・制度的には部落は存在しないのだから、ここを部落だと指定し、あるいは判定することは何人にもできないことである。だが事実上、謬れる社会的通念と偏見によって、長い間部落とみなされてきた所、そして現にそうみなされている所が部落そのものであり、そのいわゆる部落に生まれ、部落に育ち、現に部落に住む人々、また近い過去に部落に流入して来た人々、あるいは部落外に居住していても、近い過去に部落と血縁的つながりを持つ人々が、部落民とみなされているのが現状である」一と、その実相を指摘している。

## 大学でアジアへの道を選択

いろいろな事情が重なったこともある。しかし、長じるにしたがって、私が中国やアジアへの関心を深めていった背景には、やはり台湾と奈良での「二つの原体験」がつきまとっていたのだ、と思う。

## 下積みのアルバイト

家が貧しかったせいもあり、大学への進学は、半ば断念していた。そして、私なりに高校時代を精いっぱい生きようと思い、生徒会長のほか、応援団長、弁論部長、そして駅伝の選手と、自分の青春を燃焼させていった。だが、母親の目には、こんな息子の行動が頼りなく映り、どうしても進学させなければ、と思っていたようだ。先生方からも、「ぜひ進学を」と勧められていた。

田舎の高校で、その日暮らしの勉強しかしていなかった私は結局、卒業後に受験勉強に取り組み、人より二年遅れて、東京外国語大学で中国語と国際関係論（特に中国を中心としたアジアの地域関係学）を学ぶことになった。当時はまだ、「外国学」をやるならば、英語を磨き、欧米問題を研究するという風潮が支配的だった。しかし、私自身は、もっと中国や近隣のアジア諸国の問題に目を向けなければ、と心に期していた。

東京へ出たら、まず学生寮に入り、アルバイトをすれば何とかかなる、と思っていた。だが、その目算は、最初から狂ってしまった。当時、「貧乏学生の巣」と言われていた、東京外大の学生寮への関門は極めて狭く、選考書類に「若干の送金あり」と正直に書いたところ、にべもなく落とされてしまった。

要領が悪く、東京でも下積みのアルバイトから始めた。それは、住み込みの「乳搾り」の仕事だった。

場所は、中央線沿線の東中野駅から南西へ七、八分のところにあった。まだ戦後の焼け跡のままの、二百坪ぐらいの敷地の一角に、八頭のヤギを収容する小屋と柵があった。住居はバラック建てで、六畳大の板の間と、三畳大の土間があるだけ。ご主人と、もう一人、三十代のKさんがいた。ここへ新たな“闖入者”が加わったのだ。

何しろ、昼間は学校へ通うため、朝晩の労働は厳しく、かつ日曜日がなかった。おまけに、「下宿代」と差し引きという形で、手にする報酬はゼロだった。

毎朝、四時半に起床。搾乳、消毒、ビン詰め。Kさんが早朝の配達に出かけている間に朝食の支度。そして登校。当時は、大方の学生が制服、制帽、革のカバンを下げ通学していたが、私は亡父の冬服を改造したジャンパーを着て、無帽、フロシキ包み、下駄ばきという格好だった。

午後三時すぎ、大学から戻ると、リヤカーを引いて、豆腐屋と米屋で「おから」と「ふすま」を購入。これに配達先の家庭から集めた、野菜の切れ端や果物の皮をまぜ、ヤギた

ちに与えた。その後は、「牛乳ビン」洗淨、搾乳、夕飯の支度。食事の後片付けをすませると、ヤギたちに夜食を与え、十時すぎに銭湯へ。十二時近く、死んだように就寝。そして四時半に起床。こんな毎日の繰り返しだった。

母親から月に二、三回の便りが来た。月末の手紙には必ず、三千円がしのばせてあった。当時の母の給料は、度重なる物価との調整で、五千円余りに上昇していた。とは言え、私一人のために、月収の半分以上も送金していたのだ。田舎に残る弟妹たちは、どんな暮らしをしているのか。胸のしめつけられる思いだった。母親からの手紙は人前では開かず、よく外へ出て、月明かりの下で読んだ。そのたびに、ボロボロと涙がこぼれた。

「オレは何のために東京に出てきたのか。食べるために生きているのか。生きるために食べているのか」

## オンボロ寮の生活

自問自答を繰り返した末、半年後の十月中旬、思い切ってここを飛び出し、モグリで学寮に転がり込んだ。最初は肩身の狭い思いをしたが、ありがたい「赤貧仲間」の温情に包まれて、すぐに慣れていった。

外語の寮は、東京広しといえども、最もオンボロな寮だった。床板と同じ高さの、十六畳から十八畳の部屋に、平均六人が割り当てられていた。建てつけが悪く、冬は冷たいすきま風が容赦なく吹き込んできた。みんな押し入れにもぐり込み、リンゴ箱を机に、電気スタンドの熱で暖をとりつつ書物を読んだ。就寝は畳の上だったが、朝起きると、体を温めるために飲んだ、前夜の白湯が、よくバリバリに凍っていた。しかし、ここには、心の自由と、時間の余裕があった。

やがて、公認の寮生となった私は、二年生になると、学寮の選挙に立候補して、「委員長」の座に収まった。恥ずかしい話だが、最大の理由は、「委員長」と「炊事委員」だけは、食費がタダですむ特典があったからだ。このころから、田舎出の純朴な若者だったはずの私の中に、次第に“凶太さ”が加わっていった。

殺風景な寮にも、それなりの楽しみはあった。それは週に一回巡ってくるコーラスのひとつときだった。

近所の町工場や中小企業で働く若い男女の従業員たちも、気軽に参加していた。日本やロシアの民謡のほか、中国の民謡もかなり覚えた。私は合唱ではいつも、バスを引き受けていた。

寮生時代には、よく左翼系の団体や党関係の組織からの勧誘を受けたが、どこにも加入しなかった。

しかし、学生運動には、私なりに深い関心を寄せていた。当時、東京都内の学生寮連合会の中央執行委員にもなっていた私は、学生の中でも最も貧しい寮生の生活と権利に圧迫が加えられるときは、懸命にこれを阻止した。

その一例は、地方出身の学生たちの選挙権を親元の住所に移すといった、当時の自治庁通達が出たときだ。都会で強かった左翼政党支持の票を、分散させるねらいがあったのだろう。外語の寮は反対運動の先頭に立った。陳情や抗議のため、自治庁や区役所にも出かけた。朝食が終わると、寮の食堂の食卓をかつぎ出して、中野駅や東中野駅で署名運動を展開した。あのときは、学生運動に無関心な友人たちも一人残らず参加し、署名獲得数は都内のどの大学の寮よりも多かった。これが他大学の間でも話題になり、あちこちから大勢の学生が視察に来た。

## 『矛盾論』を卒論に

三年になって、私は一年間、寮生活を離れた。そして、新聞配達をしながら安い下宿に住み、読書と卒業論文の準備に取りかかった。卒論のテーマは「毛沢東の『矛盾論』にお

ける、主要な矛盾と矛盾の主要な側面について」だった。

夜明け前の中国には、複雑多岐な矛盾があった。毛沢東はこの中から、二つの支配的な矛盾を取り出した。一つは、「帝国主義と中国民族の間の矛盾」、他の一つは「中国内部の封建制度と人民大衆の間の矛盾」であった。帝国主義の圧迫が激しいときは、前者が主要な矛盾となり、それが比較的希薄なときには、後者が主要な矛盾となった。

ところで、この二つの主要な矛盾は、それぞれ主要な側面と、副次的な側面を持っている。革命の未熟な段階では、帝国主義や封建勢力が矛盾の主要な側面、それに対応する中国民族や大衆の力は、矛盾の副次的な側面に位置していた。しかし、革命が進展するにつれ、この副次的な側面が、主要な側面へと転化していった。

私の心をとらえたのは、毛沢東がこれに関連して、「事物の性質」について述べている次の文章だった。

「事物の性質とは何か。事物の性質は、主要な矛盾の矛盾の主要な側面によって決定される。したがって、主要な矛盾の矛盾の主要な側面に変化が起これば、事物の性質も、それにしたがって変化する」

以前に何度も目を通しながら、素通りしていた個所だった。しかし、卒論に相対して読み直したとき、一種の衝撃を覚えた。これは、事物の性質を固定的、不変的につかむ形而上学的な思惟に、ともすれば陥りがちだった私の目を覚ます新鮮を言葉に映った。

それまでの自己の体験と思索を、総動員しつつ卒論をしたためた。たった四百字詰め三十五枚の小論文だったが、卒論担当の歴史学の教授は、「よく自分のものにして書けているよ」と高く評価してくださった。

四年になって、再び学寮に戻った。努めてアルバイトを制限し、就職試験に備えた。

学内の就職相談で清水元助・主任教授は、「君は新聞記者になれ。できれば、中国やアジアの新しい動きを、しっかり見つめていってほしい」と言われた。次席の田中清一郎教授は「田舎で小学校の教師をやるのが、君には一番似合っている。次代の若者を育てる大切な仕事だ」と言われた。

私は結局、ジャーナリストの道を歩んだ。そして三十五年後に、朝日新聞後援の朝日中国文化学院で、中国語や中国事情を教える身となった。かろうじて、いまは亡き二人の恩師の「付託」に応えることができた、と思っている。